

高尾山 歴史の散歩道

38

明治大学博物館 外山 徹

伽藍の形成

八王子の追分を出発したこの連載も、いよいよ仁王門の階の直下まで辿りついた。表参道を進む道すがらおりおり山内の移り変りに触れてきたがいよいよ伽藍の中心に進むところで、その変遷について整理してみよう。

中興の頃

史料の同時代性はさておき、ともかく縁起文の中で触れられる伽藍のはじまりはどのような経緯だろうか。

寛延三年（一七五〇）の年次をもつ高尾山縁起には、高尾山中興の祖俊源来山の逸話が述べられる。それによると、**始め方丈を立て、茅・茨を以て経像を庇う。**という。行基による開山

造物の態をなすようなものではなく、萱・茨で覆った粗末なものだったという描写である。

その、高尾山中興の根元とも言える地点がどこであったかは想像の域を出ないが、江戸後期の官撰地誌『新編武蔵風土記稿』（文政五年・一八二二）によれば「独鈷水」という井戸があり、俊源が水を得た場所ということになっている。固よりこの記述も史実の裏付けとは程遠いものであるが、合理的に解釈すれば、生活のために水は欠かせないものなので、一定程度水場の近くに住居する必然性はある。そうすると清滝へ注ぐ水流や琵琶瀧川も考えられるが、山中に湧水のある場所として『風土記稿』が「寺の裏門の外二十歩ばかりを隔てて右の方」とする独鈷水を水場としたとすれば、現在の伽藍からさほど遠くない場所となる。

今日の山上は一定の平地が山城の廓のごとく

段々に連なるが、自然の地形には大分手が加えられているようで、俊源来山の頃を偲ぶ縁はない。

高尾山薬師堂の時代

同時代の史料に現れる最初の堂は、永禄三年（一五六〇）一二月の北条氏康による寺領寄進状に見える「薬師堂」である。当時、高尾山のことを「薬師山」と記す文書もあり、薬師如来を祀る霊山という認識があった。現在こそ薬師堂という堂は存在しないが、明治十九年（一八八六）九月の台風による被災までは常に伽藍の中心にあった。

寛永の再興

後北条時代の薬師堂がその後焼亡したことは、高尾山八世源実の筆による勸進帳案から知れる。その文面には「前代は金銀を以て磨ける堂塔有り、坊千余」という記述があつて、「坊千余」は誇張にしても、山上の伽藍が薬師堂のみではなかったことを示している。また、薬師堂は焼亡した

ものの、「今一院に僧四五口有り」という記載からは、荒廃に瀕したとは言え、残る建物もあつたということになる。しかし、いかにせん具体的な検証のできる材料は一切ない。ただし、同じ時代地方において山中に仏を祀る「観音堂」「文殊堂」といった呼称で人々の信仰を集めた堂は各地にあり、建築が考証されている事例もある。政治の府の近くにあつて豊を連ねる大伽藍ということではなく、恐らく、高尾山薬師堂の佇まいもそのような素朴なものだったのであるまいか。

堯秀が高尾の地に来て、どのような手段を講じたのかは一切不明ながら、現在、大本堂前に残る寛永古鐘の銘文と寛永八年（一六三二）三月付のその勸進帳が数少ない手掛かりとなる。銘文によると、鐘の完成は九月とあるの（製造に要する時間も考えると）わずかな期間で必要な資金を集め得たことになる。そして、寛永一四年の文書には「飯繩・薬師堂宮」「薬師堂の近所いつなの宮」という文言が見え、本尊である薬師如来を祀る堂と飯繩大権現を祀る社が存在したことが確定できるが、それに先立つ寛永八年九月の高尾山中を通り抜けて小仏関を迂回する者の取締を命ずる幕府老中連署の文書は、その時点で、すでに相当の参詣者が存在したことを示している。これは、鐘銘にある「旅客の装を促す」という文言にも符合する。建築史の側からは、現在の奥之院不動堂が寛永

年間の建立とされ、大師堂は修築の手が入っているものの、基本的に同じ様式を持つている。それぞれ、寛政二年（一七九〇）付「当山絵図面下書」にある護摩堂・大日堂に相当するものとなり、間に一回り大きい薬師堂をはさんで、三棟が現在大本堂の建つ平地に並んでいたことになる。また、延宝年間（一六七三〜八一）の火災で被害を受け、貞享元年（一六八四）に再建される仁王門もまた三棟と同時期のものと推定されている。

寛永古鐘の勸進帳には「飯繩権現」の尊称も出てくるので、恐らく鐘の復興は薬師堂を中心とする伽藍の復興の棹尾を飾るものだったのだろう。この時代、未だ寺領の認可を受ける以前、十世堯秀がどのような手段で再興の原資を得たのか全く定かではないが、ともかくも戦国の末に荒廃した伽藍は見事に再興されたのである。



仁王門の背後、現在の大本堂の位置には薬師堂を中心に三棟が並んでいた（八王子名勝志、国立国会図書館蔵から）

江戸中期の展開
現存する飯繩権現堂は享保一四年（一七二九）に建立されたもので、棟札や近隣の上栢田村旧家の日記からそれが分かる。

小町和義氏の研究によれば、その後、段階的に拝殿・幣殿が整備され、今日の威容となったのは宝暦三年（一七五三）の拝殿・幣殿再建を経てのこと

とになる。安永年間（一七七二〜八一）には庫裏・書院が建立されるが現在の書院の位置にあつた薬王院本堂は寛政の絵図面の後に建立される。

飯繩権現堂の建立に象徴される享保期の興隆は紀伊徳川家の祈禱所となつたことが背景にある。八代將軍に転じた吉宗の後を受けて、伊予西条の支藩から入った藩主宗直が高尾山と関わりを持つようになつた契機は堂宇修築料の寄進とされる。延宝の火災以降の状況は不明であるが、以後、宗將・重倫と続く三代の間には、八千枚護摩供養、十萬枚護摩供養が度々執行され、同じ時期庶民参詣も活性化し、伽藍の整備が進んだ。そして、一九世紀を迎える頃、山内の情景は俄然明らかとなる。

《参考文献》
小町和義「高尾山の建築について」（多摩文化第二四号武州高尾山その自然と歴史）一九七四